家庭雜誌

第參拾號

健全なる身躰、健全なる家庭　健全なる身躰は、健全なる家庭を作る。

海濱の快樂　海の生命を研究するに在り。

歐洲諸國王家の片影　羅馬尼亞の寶位には、才貌花の如き一婦人坐せり。

膝坊主の傳　是は此の子の悧巧なる彰標なりし。

外國戻り　首を回せば、猶胸底に波たつを覺ふ。

新法の金儲

新奇發明 有益秘術

版權所有

洋綴全一冊 正價金八拾錢 郵稅八錢

再版 五拾錢

色寫眞術 寫眞的 石版寫眞 寫眞版法 石版法 寫眞器製造法 印畫法 寫眞印畫法 色寫眞法 石版寫眞法 腐蝕版 寫眞術 寫眞版 美彩寫眞 人造法 金製造法 化粧品製造法 新案製造法

發行所 都屋商店

每月出版 十二冊完結

十二文豪

每冊 定價拾八錢 郵稅○四錢宛

第一卷 カーライル

第二卷 マコウレー

第三卷 荻生徂徠

第四卷 ヲルヅヲルス

第五卷 ゲーテ

第六卷 エマルソン

以上既刊

發兌元 東京京橋區日吉町 民友社

本社電話番號七十番

發行兼編輯人 垣田純朗
印刷人 塚越芳太郎

發行所 東京市京橋區日吉町四番地 家庭雜誌社

明治二十七年五月廿五日發行

家庭雜誌第參拾號

目錄



家庭雜誌第參拾號
（明治二十七年五月二十五日發兌）

社説

健全なる身躰、健全なる家庭

心と身躰とは、譬へば影と形の如く、深密なる關係ある者にして。精神の健全は、概して身躰の健全に伴ひ、又た身躰の健全より來ること、萬々疑ふ可らず。頭痛がすれば、氣か欝し。空腹の折りには、勇氣か挫け。胃病の時には、癇癪か起り。之に反し血液の循環善く、消化機能く働らき、身躰何も申分なき時には、精神自から活潔にして、事に當りても、人に接しても、愉快ならざるはなし。

されば健全は百福の基ひにして、特に一家を治むるものは、宜しく此事に心を用ひねはならぬなり。老人子供は固よりの事、一家に健全の風あるは、其の家庭の光明にも、調子にも、風儀にも、大なる影響を及ぼすものなるを忘る可らず。

扨て如何にして健全を保つ可き乎、若し衛生上の理窟より云へば、それ〴〵面倒なる理由もある可し。今吾人が陳へんとするは、其の普通一般にあり觸れたる理窟にして、何人も行ひ得可く、又た何人か行ふも、その効能多き要點に外ならず。

（第一）は朝起きをなし、夜深しをするなと云ふことなり。朝起きと夜深しとは、決して兩立するものにあらざれば、孰れをか擇まさる可らず。夜を深すものは、必らす朝寢を貪ぼるものなり。夜を深せば、その精神を憊らしめ、朝寢をすれば、其の一日の秩序を破る。一の得なくして、兩つの損あり。況んや夜を深くすれは、自から一家の中に、種々なる過ちを生する者なきを

必ず可らさるに於てをや。罪悪は夜の見なり、故なく夜を深すは、單り肉躰の健全に害あるのみならず、亦た精神の健全にも害あるものぞかし。

税所敦子刀自の歌に曰く、

さし櫛のあかつき起きは黒髪の
長きいのちのもとゐなるらむ

と。洵に愛度き意味を含めるものにして、朝起の健全を保つ所以の意、自から明らかなるにあらずや。

（第二）は清潔てふ事をゆめ〳〵忘る可らず。不潔は腐敗を意味し、腐敗は不健全を意味す。之に反し清潔は其の極意に於ては、健全と同一の意味合ひとなる。

清潔とは先づ家の隅より隅迄、清らかに掃除し。其の他一切の器具調度より、衣服に到る迄。敢て美麗を要せずと雖も、決して垢附き、穢らはしく、汚らはしくなき樣に肝要す可し。別けて其の身躰を清潔ならしむるは、健全の第一方なり。總て汚垢を以て氣孔を埋むるは、百病の媒因たらさるはなし。中にも小供の如きは、能く其の身躰を清潔ならしめされば、不測の病に罹ると多し。

兎角婦人は、戸外に出る時には、只管ら清潔を事とし、甚しきは清潔極りて、或は不潔に陥る程、白粉を塗り、紅を抹し。香水を振り蒔き、靚裝炫服すれとも。家の内にある時には、髪は蓬の如く、顔はくすぼり、その衣服抔も、垢目のつきたるをも厭はず、平氣にて着し居るもの鮮からず。願くは外に出る時の熱心と注意とを、家に在る時に分ちたきものなり。何となれば外に出ることは、十日に一日にして、その他は家にあると多けれは、家にある時の嗜み方、尤も専一なるをよしとすればなり。

さりとて誤解する勿れ、清潔とは修飾の意味にあらず、唯だ本來の眞美を保つとなるとぞ。されば吾人は家にありて、賓客に行く時の如く、雛樣の如く飾り立てよ

と云ふにあらず、唯だその身躰は固より、その身邊の清潔を保つと云ふなり。破れたる衣服も、之を補綴し、之を洗濯すれば、是れ清潔なる衣服となるなり。破れたる鏡臺も、正しく置き、塵を去れば、清潔なる鏡臺となるなり。清潔と不潔とは其物の種類よりも、其物を保つ所以の道なるを知らざる可らず。

(第三)節制てふと、特に飲食の節制てふとを大切となす。飲食の節制にて、就中大切なるは、三食の時間外に、菓子、餅抔の間食をもてはやす可らざると、又た酒を亂れ用ゆるとなきと是れなり。

間食は遊惰と伴ひ、遊惰は精神の不健全を伴ふ。その身躰の不健全を成すが如きは、固より云ふ迄もなし。特に小供抔に取りては、胃病を生し、終身不幸の禍因を養ふもの、其の害挙げて數ふ可らず。

家内に酒の流行するに到りては、一家の不取締りは勿論の事、揔ての罪惡、揔ての過失、概して此れより胚胎せざるものなし。家内の平和を破り、秩序を破り、何事も手に附かず、一家恰も颶風の荒れたる如くならしむ。不潔も此れより來り、夜深しも此れより來り、朝寢も此れより來る。

されば我が一身は申すも更らなり、一家にだて、三食以外に、飲食を取りはやし、放食流飲を事とする、惡風習を退治するは、健全を保つ所以の大なる道なると、豈に疑を容れんや。

以上申し陳へたるとは、寔に珍らしからぬ話しなれども、世間有勝の事なれば。先づ手初めに、此等の點より心を用ひ力を盡し、以て一家百歳の福壽を全ふするとを勉む可きなり。

身正しければ心正しく、身健全なれば心健全なり。二者決して區別す可らず、故に吾人は先づ身を正しくして身を健全ならしめ、而して心を正しくし心を健全ならしめんとを欲す。

科學

海濱の快樂　其一

一年中の大休暇は、今や眼前に迫まれり。一年間の事業に疲れ果てたる腦髓を、清よけき海濱のさゝ波に洗らい、濱邊の貝を拾ふと共に、强壯なる健康を拾ふは、如何に幸いならずや。我等は此の幸福を有しながら『飽』てふ惡魔に逐われて、此の幸福を捨てゝ逃げ歸るが如きことあらば愚かしき事なり。海濱に飽くは、海濱の快樂を知らざればなり。海濱を去るは、その樂しみ家に若かざるを思へばなり。されど海濱程面白き物はなし。海濱程變化の多きものはなし。我等が海を死物とせずして、精細にその生命を調らぶる時は、如何にその面白く、驚くべく、恐ろしきを知らん。

海

我等は海中の生命を研究するに先ちて、海とは如何なるものなるかを知るを要す。

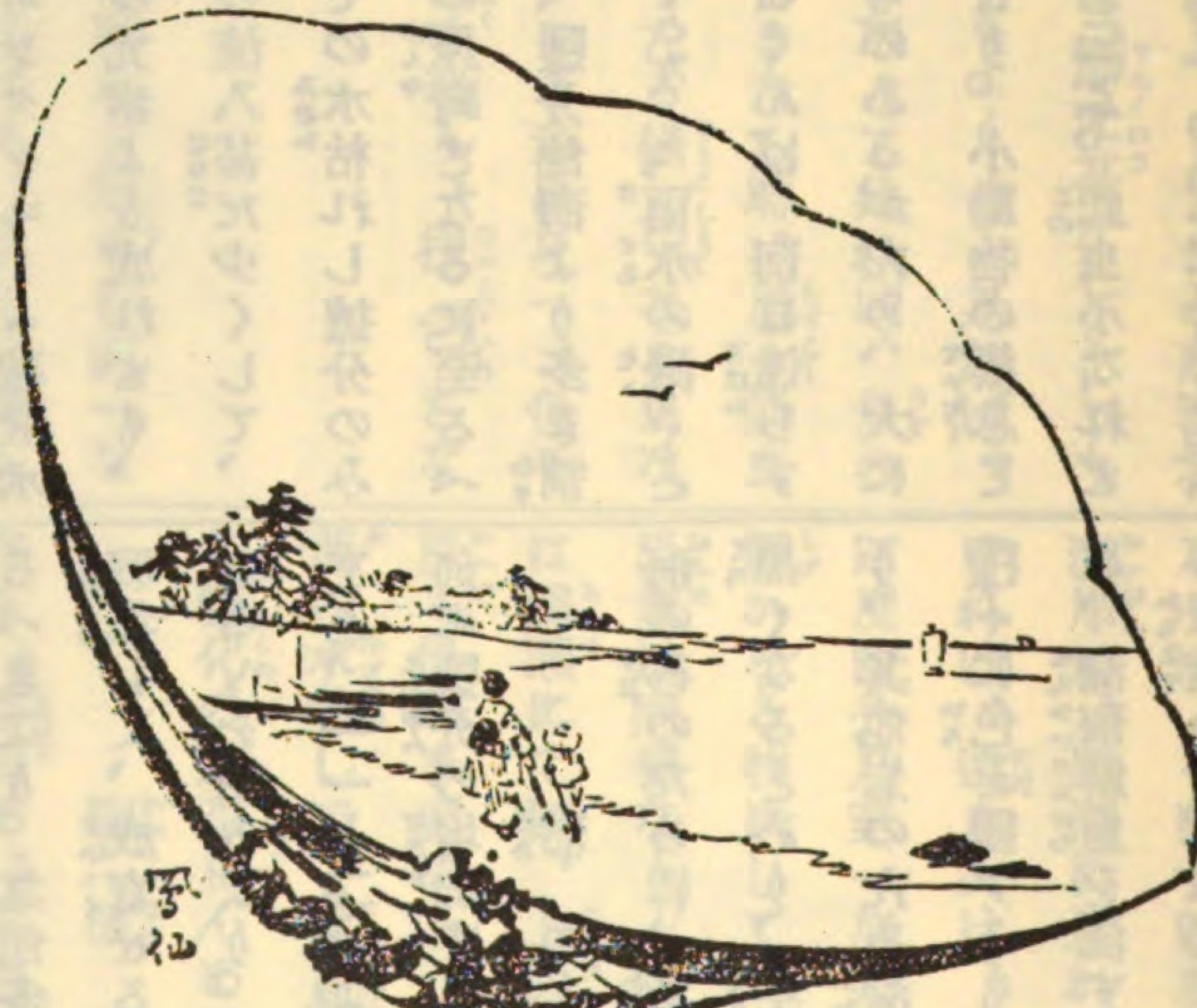
最近の學説に由るに、地球は一億四千八百十七萬九千八百〇八方哩にし、之れより陸の三千九白五十三萬四千四百四十四方哩を取り去りし、餘の一億〇八百六十四萬五千三百六十方哩は皆水界なり。即ち陸を一とすれば、水界は二、七殆ど四分の三の大さありと云ふ。されば地球上にありては、水界が眞の主人公にして、陸は僅づかに付きものたるをまぬかれず。

海底の深淺

海底の深淺は、波のために測量器をおし流さるゝが故に、精細には計り得ざれども、我が國の海は、概ね深く、殊に、大平洋に向かひて北緯四十度の沖合は世界中の最深海と稱せらるゝ處にして、深かさ四千餘尋あり。但し深さ五里以上に至たれば測量器波濤のために

おし流がされて精密に測るを得ざれども、或る人は七千より八千尋の深さ迄計りし事ありと云ふ。アトランチック海の南に當りて、深き所あり。米國の一軍艦は、その處を測量して、五萬尺迄は計りしも、尚ほ測量器の海底に達するを見ずと云へり。日本海は太平洋の如く、深からずして、能登沖にある一深所を除かば、大概八十尋を過ぐる處なし、彼の播磨灘の如きは、二十尋、水島灘は十尋、大坂灣は十乃至二十尋、周防灣は二十尋に過ぎず。

今ま若し凡ての海水を一つに集つめて、直徑五六十哩ある丸き地球を作りその表面を覆はしむると假定せば、その地球の上を覆ふたる、水の深かさは、六十呎以上に達すべく、又た假りに、水を四角の箱に入るゝとせば、その箱の内部は、二億二千五百〇〇〇、〇〇〇立方寸なかるべからず、又たもし世界中の海を全く干し盡くし得べしと假定する時は、今日の河が、四萬年の間、水を灑そがざれば、元の如くなり得ざるべしと云ふ。



海水の鹽分

海水と淡水の比重は淡水千に對して海水は千二十七の割合なるを通例とす。元來海水は、河水の持ち寄りたる、種々の礦物質等を含みたる水にして、大陽の熱のために、蒸發氣は蒸發して去り。

混和物は殘りて、河水とは變りたる一種の水を作る。即ち通常の海水は、千分中淡水九百六十二分と、海鹽二十七分と、マグチシユーム、ポツタシユーム硫酸水素、鹽酸アンモニア、其他二三の元素より成れども、彼の死海、裏海等の如き、河水の流入甚だ少くして、蒸發氣甚だしき海水は、漸々にその水枯れし塩分のみ殘り行を以て、遂には大なる鹽の原野となるに至るべし、我が國にても、瀬戸内海等は、鹽分他海より多き割合なるが、もし之に川の流れ込むとなく、雨水の濺ぐとなく、又た小動物の棲息するとなくんば、海は遠らず鹽原となるべけれども、以上のものあるがため、大に鹽水の平均を保もつの助けを爲せり。小動物の棲息とは、珊瑚島等を作る小動物の類を云ふ。此虫小なれども、其數は實に無數にして、一立方寸の中に五萬八千、〇〇〇個以上も結集するが故に、水中の固形物を食して、躰を組織し、その躰は他の躰と積み集り、相重さなりて、かゝる大島を爲すを見れば、如何に其數の多くして、海鹽の平均を保もつために、必要なるかを知るべきなり。其他多くの海草の如きも、多量の鹽分を吸集して、成育せるを以て、内海が鹽原となるを免ぬかるゝを得るなり。死海の如きは、年々鹽の分量を増すと、一一七二、より一二二七に進むの割合なり。如何に鹽分の増加するの甚だしきを知らん。

海の色

海の砂のために、黄色なるとあり、藻草のために、青黒くなるとあり、空の色のうつりて藍色となることあり、其他岩のため深さのため、魚のため、虫のために、種々に色を變ずるものなるが、夜中に至り燐虫のために、滿海鮮血を流すが如きものあるは、殊に研究するの價値あり。我國にては最も燐光の強よき所は、黒潮なるが、其他の海にても、夏の夜等海面を打たば、燐光烱々たるを見るを得べし。ケアプテン、キングマン

氏、嘗て印度洋を渡る中、一夜八時頃よりふと海水、一面眞白となりしが、夜中を通して二十三哩の間眞白なる雪の如き色は去らざりしと云ふ。又た他の航海者は、喜望峰近海て、四月十日の夜、燐光甚だしくして、鮮血滴たるが如くなりしが、之をよく〳〵見れば、水中に小さき球あり。更らに手に取りて見れば、魚の卵子なりきと、我等も海水浴に行きたる時、屢々燐虫を見ることあり、燐虫は黄味がゝりたる綠色なる虫なるが動き始むると仝時に、種々なる形に見へ、色も黒味がゝりたる赤となり、青天色となり、橙色となる。

海の温度

潮流のなき海水にては、その温度殆んど空氣と同一なるかもしくは少しく温たかき位なれども、水面を去るいよ〳〵遠ければ、いよ〳〵温度低くなりて、赤道直下にても、七千呎の深底に至たれば、遂に零度以下となる、我邦の海面は、通常の處にては、十八度前後にして、深さ百尋に至れば、十五六度となり、五百尋にも及べば、もはや四度内外となれども、之れは我が國の海岸が、黑潮に近かき故にして黑潮を去るいよ〳〵遠ければ、遠き丈け、温度下降し、遂に表面にても尚ほ四度四分乃至一度九分位となることあり。元より海底は、靜かなる物にして、水の動搖更らになきが故に、大凡温度は同樣なり。たゞし海濱に最も近かき處、若しくは淺瀬にては、上面の水、反て冷めたく、下低の水、反て温かき處なり。之れは下の土の燒けたるため、下部の水熱して、上に昇らんとして、水の動搖する際に起る變化の爲ならんと云ふ。

海流の原因

水も、空氣と、同じく、常に温度の平均を保もたんとするの性質を有するものなり。之がために、赤道直下にて熱せられし水は、兩極の冷水と平均せんとして、

表面を通りて兩極に向かひ、兩極の冷水は下部を通りて赤道直下に向ふ、之がために海流は生ずるなり。我國の沿岸を流通する黒潮は、即ち赤道直下にて熱せられし温水の、極地に走るものにして。或は風勢の力をかりては、その流勢甚だしくなり、或は寒暖の差によりては、その勢を増減し、其巾も或は二百五十里の處となり、或は二十餘町に減じ、遲速廣狹常あらず。黒潮の速力の最も迅速なるは、四國並に紀州大島の南にして、二十四時間に一百里を流ると云ふ。此の黒潮の外に、風の爲めに一時の皮流を起すとあり、皮流と海水の表面のみ他に移るものにして、之を隨風皮流と云ふ又た黒潮に反對して、兩極地方の冷水の赤道直下に流るゝあり。之を寒流と云ふ、寒流は概ね黒潮よりは、五度乃至八度位の低温度にして、夏はその勢ひ弱わくなり。冬はその勢强くなる。黒潮は曇天に於て は、灰色にして、晴天の時は深黒藍色をなせども、寒流は濁色を爲すを以て、一見して見分け得ると云ふ。此の寒流との通ずる近方と、暖流の通ずる所とに由りては、時候に大變化するのみならず、魚類の之に伴なわれて來り、之に伴なわれて去る、故に時候によりて漁獵に大差を生ずるの原因となると少くなからず。彼の大口魚、鱈、馬鮫、鯡の如き魚類は、黒潮に隨がつて北海より來遊するものにして、我國の魚類、貝類、及び蟹等は、寒流に隨つて、朝鮮及び支那海邊に行くもの多しと云ふ。

史談

歐洲諸國王家の片影（六）

八、婁馬尼亞

歐洲波瀾の常に立ち騷ぐ東方の瀬戸口に横はりたる三個の暗礁あり。ブルガリアと云ひ、セルヴィアと云ひ、

ルーマニアと呼ぶ。其建國は皆二十餘年來の事にて、其國皆到て小なれ共、事の多き關係の大なるを以て世に有名なり。此三個の暗礁の中、燈臺の如く光れる二名の婦人あり。セルヴイアの舊皇后ナタリーと、婁馬尼亞の皇后エリザベツトとは即ち其人なり。前者は美人として薄命の婦人として有名に、後者は其優美の風姿と翩々たる才情を以て有名なり。殊に後者は聲名歐洲に高く、婁馬尼亞國王カロル一世の名を知らざる者と雖とも、婁馬尼亞の寶位に才貌花の如き婦人の坐するを知らざる者なし。實に花の皇后は、君王を蔭うち去れり。

婁馬尼亞后、實名をエリザベツトパウヴン、オツチリアと云ふ。日耳曼の一皇家ウアイド親王と、瑞典皇后の姉妹なるナツソオ公爵夫人の最愛の一人女なり。后天性穎敏、三歲にして字を識り、五歲にして學校の女教師を希ひ、十歲にして好むで詩を作り、其故里なる日耳曼のヌウーアイドに父母と共に住みて美しく長ぜられたり。

猶十代のエリザベス公主は、野花の如く自然に、野飼の駒の如く活潑なりき。落さば腰を過ぐ可き黃金の髮



を後ろざまに投げ結び、蝶を逐ひ鳥を追ひ花を採り林を穿ちつゝ、夏服の裾を蹴つて飛が如く走せまわられける。然るに十七の歲伯林に於て、一日例の如く飛ぶ樣にして宮中の階段を下られしに、足踏み辷らして眞

逆様に階段を滾び落ちられぬ。恰も好し、階下に一人の男子あり、腕を廣げて落ち來る公主を受とめたれば、公主は幸に恙なきを得たり。誰か圖らむ、公主は即ち未來の良人の抱中に落ちたるならむとは！。

然れど此頃の公主は猶野馬の如く自由に荒れ廻るを好むで、結婚の束縛を受くるを欲せず。人の結婚を言ふ者あれば、公主即ち答へて曰はる様、妾は婁馬尼亞の皇后ならでは得こそなるまじけれ」と。此時婁馬尼亞と云ふ國は、影だにも歐洲の地圖になかりき。公主は斯く言ひて、五月蠅く結婚を勸むる者の口を塞がれしなり。斯くて公主は二十過ぎても猶田舍少女の如く好むで林間を驅け廻はり、好むで天然に親しみ、愛の戀のといふ事は夢さら〳〵思ひ寄らぬ風なりければ、公主の知己は皆公主を「ウァイドの野薔薇の蕾」と名づけて、また結婚の事を云はざりけり。

然るに不思議なるは世の中なり。年月過ぎ行く中、宛ながら桶の水を攪して一塊の芋頭浮み出でたる様に、婁馬尼亞てふ國は歐洲波瀾の中より搖り出され、曩きにエリザベット公主を階下に受けとめたる日耳曼の一皇族カル、親王、偶然婁馬尼亞の國君に擧られたり。

エリザベット公主の方にては、此の數年の間に父を喪ひ幼弟を失ひ愛友を喪ひ、公主は唯詩を作り音樂を弄んで憂を遣り、世の中の事殆んど忘れ果てたる様に暮らし居られしが、猶他に忘れざるの人ありて、カル、親王は婁馬尼亞の國君に擧げられて三年目、不意にエリザベット公主の家に來りて、婁馬尼亞皇后たらんことを求めたり。斯くて「婁馬尼亞皇后ならでは得こそはならじ」と言へる公主は、不思議にも其の無意識的の豫言に應じ、千八百六十九年婁馬尼亞皇后として國都ブーカーレストに入られぬ。時に公主二十六歳の年なりき。

婁馬尼亞は東洋人種の國にて、其國民の感情馭し難く、

殊に猶未だ十分に固まらざる新邦の事とて、之に君臨するは一ト方ならぬ困難なりき。然して新皇后は國に入ると齊しく、先づ其花の如き風姿と、温言微笑を以て國人の心を懐け、次で婁馬尼亞語を學び、國の需要を學び、學校病院美術館縫箔學校料理學校等を設け、通俗講話を奬勵するなど、心を碎きて國の爲めにと盡されしにぞ、國民は「阿母よ」と呼びて、母の如くに皇后を慕へり。

千八百七十七年の露國と土耳其の戰爭は、猶も皇后の名を揚げたり。此戰に於て婁馬尼亞の君カル、親王は手兵を提げて、露國の旗下に勇名を轟かし、而して皇后エリザベットは自己の財嚢を倒にして負傷者を助け、自から綾羅の衣脱ぎ棄てゝ、赤十字の看護婦の衣裳着けて、他の看護婦と共に死者負傷者の累々たる間に立まぢり、言を以て慰め、手を以て撫し、恰もナイチンゲール孃のクリミヤ戰爭に於けるが如く、暗黒苦痛の洞中に慈仁の光りを放てり。今も國都ブーカーレストの公園に遊ぶ者は、優美なる婦人が手負の兵卒に一杯の水を與ふるの大理石像を見む。是れ婁馬尼亞の民が忘るゝ能はざる感謝の念を永久に表せむとて建て設けたる所也。

千八百八十一年に到り、婁馬尼亞獨立の基礎全く定まり、侯國は進むで王國となり、此年五月國君夫妻は新に王冠を戴けり。冠はプレヴナの戰に分捕せし土耳其の大砲を鑄て造りたる鐵冠なりき。爾來玆に十四年、后エリザベットの人望はます〱加はりぬ。げにもブルガリア及セルヴィアの常に紛々多事なるに引易へて、婁馬尼亞が比較的に平和を享け、國基漸く定まり、民心悆服するに到りしも、皆是れ后エリザベットの常に質直剛訥なる良人と人民の間に立つて、或は和らげ、或は温め、常に疏通融會の任に當らるゝの致す所多きに居れり。

羅馬尼亞國王皇后は、冬はブーカーレストに住み、夏はカルパシアン山中のシナイアにあつて、勤勉の生涯を送らるゝなり。皇后は往々朝四時に起て夜八時まで働かるゝことあり。王后共に時としては十二乃至十五時間も話し續けらるゝの必要ありて、皇后も曾て之が爲に全く音聲を嗄らされしことあり。晩餐の席につきては、王后共に一日の勤務に疲れ果てゝ一語も話し得られざる事あり。而してブーカーレストは歡樂の市と稱せらるゝ程夜を深す都會なれば、羅馬尼亞王皇后の生涯は中々氣樂なる生涯にあらざるとなり。皇后近年少しく老ひたれ共、猶活潑にして能く働き、宮中の者は皆皇后を「旋風」と諢名せり。

當今歐洲諸國王家の君王后妃の中に就て、文學上の名譽を擧げたる者は、羅馬尼亞皇后を第一とす。カアメンシルヴアと云へば、今日の歐洲文學界に一人も知らざる者なし。カアメンシルヴアは羅馬尼亞皇后の文學者としての異名なり。后の筆より出でたる詩歌小說は甚だ多し。初生の子を喪ひて心の悲を筆に漏らせし篇の如きは一字一涙と云ひて不可なかる可し。佛國の學士會院も先年后の著に向つて特別賞牌を贈れり。后の如きは、其位を奪ひ、唯一私人として世に立たしむるも、其文筆の跡は必らず其名を暗黒の中に埋沒し終らざる可し。后當年五十一歲也。

文藝

膝坊主の傳

湖處子

（上）

知るべからざる昔の事なりき。なにがしの山里に、夫婦の樵人ありけり。夫婦が中には、七人の子を儲けたるが、僅かに十歲を頭にて、生活の助となるもの一人

もなければ、夫婦はいとも貧しく暮しき。尋常の事なれば、夫婦貧苦にせざりしかど、苦になりしは、其の末子なりける七歳の子が、赤児の如く少くして、碌々



口も利かざりしとなりけり。實に是は此の子の悧巧なる彰標なりしかども、父母は獨り心を痛めて、ゆくゆく白痴と生長せんとを愛ひき。

さても其子の小きと、正しく世に云ふ一寸坊にして、人の膝よりは高からざりしかば、誰云ふとなく、渠をば膝坊主と呼べり。膝坊主は、唯其形のみならず、その角力とりては投げられ、競走しては後れ、饒舌くらしては、饒舌まくらるゝより、やがて一村の物わらひとなり居りしかども、其兄弟の誰よりも敏く、人の思へるよりも物識りなることは、誰とて知るものなかりしなり。

其ころ其國に飢饉あり、樵人夫婦は、其子を養ふと能はずなりしより、爐火の傍に、額をつきあはせて、子どもの上を問ひ語らひしが、或夜子等が臥せりし後、樵夫の殘れる榾をさしくべつゝ、吐息をつきて涙をうかめ、妻に語りていひけらく「御身も既に知る如く、此二三日は、食ふや食はずの有樣なれば、最早子どもを養ふとも難かるべし、さればとて可愛ゆき子どもを目の前に見殺すべきにもあらねば、明朝渠等を山につ

れゆき、道なき森に渠等を置て、天の慈悲にうち任せん外はあらじと。

妻は悲哀に堪えかねて「さる無慈悲なることの、如何にして出來べきぞと、猶も夫に貧を說く答へて、貧なればとて親なるものをと、暫くは夫を諫めしかども、目の前に子の餓死するを見るが悲しきことを、漸くさとり、遂に夫の言葉に從ひ、泣く〱寢床にはいりにけり。

夫婦が誰知るまじと思ひしにも拘らず、終夜めざめたりし膝坊主は、盡く父母の語りし所を聞き、夜のあくるまで、明日は如何にすべきかを考へたり、渠は曉かけて起き、家を出て丶、近きわたりの小川にくだり、袂一ぱい小石をひろひ、何しらぬ顏して家に歸りぬ。

家に歸れば、親たちは子どもを促して、山ゆきの用意をいそぎ、日のいつる頃、一家こぞりて山にのぼりぬ。他の子等は何もしらねば、何心もなく、前後を爭ひつ丶山路をのぼり、膝坊主は、獨り事の情を知れども云はず、折〱獨り後れて來れども、父母は其のかよわき故とし疑はざりき。日は高く山を離れぬ。一家九人は、家を出で丶遙かに來りぬ。道は愈細くなり、山は愈深くなり、森は愈くらくなりぬ。やがて目的の地は來れり。こ丶は幹をならぶる喬木、眼を遮り、十步の前は見れども見へず、仰ぎ見れば、茂れる枝、幾重ともなく、重なりあひて日光を蔽ひ、晝も猶ほ夜の如き山中なりけり。二人の親は、此處に子供をつれ來り、樹を伐り仆しつ、枝をおろしつ、薪を束ねつ、餘念もなげに見せかけて、子ども等の、己かし丶枯枝を拾ふに餘念なきを見すまし、木立の中を忍び出でぬ。

間もなく子等は此の奧山に、獨り置かれたることを心つき、悲しさと悚ろしさに、聲あるかぎりに叫びたてたれど恰も是れ「遠近のたつきもしらぬ山中に覺つかな

くも呼子鳥哉」、答ふるものは山彦あるのみ。されど膝坊主は獨り泣かず、渠等が泣くにまかせたりき。何となれば、渠は道々小石を散きつゝ來りし故に、明かに家路を知りたればなり。渠は今兄弟たちの絕望せるを見て、慰めて曰く「兄弟よ、父母の我等をこゝに棄て玉へしとな思ひそ。唯我が後につきて來玉へ、我れ御身等を導ひき歸らむ」と。

兄弟は膝坊主に從ひて山を出で、難なく父母の家に歸れり。渠等の戶口より踊りこむとするを、膝坊主は暫しと制し、戶の外に佇すみて、竊かに裏の樣子を伺がひ、兩親の火の傍にて語るを聞けり。是より先き、夫婦が子供を置て山より歸るや、村の長者來りて、薪の代とて、二枚の黃金を夫婦に拂へり。是は久しき以前の事とて、夫婦は既に久しく其勘定を忘れ居たるものなりき。渠等は今饑えて食ふものなく、坐して死を待つばかりの折なりければ、此金を得て、生き回れる心地し、早速妻を市に遣りて、食料を買ひ調へしめしが、妻は嬉しさに、棄てたる子の事を忘れ、一家打ち揃ひて、久しぶりに樂しき晩餐を食ふるとよと、何好からん、角好からんと、擇みに擇むで、佳き物を買ひ調へて歸り來り。樂しき晩餐を調理して、火の傍に陳べ、夫婦箸を擧けんとして始めて棄てたる子どもを思ひ出し、夫婦とも胸一ぱいになり、食ふものゝ味も忘らす、子等は何處に何して居るべき。食ふものもなき山中に、何を食ひてや饑を凌げる。今頃は定めて狼の餌とこそはなり居らめと。さしむかひてうち咽べり。戶の外にあつて、親の悲歎を聞き居し子等は、父よ母よと、雀の如く躍りこめば、父母は子等を抱きて接吻し、こゝにこゝにと、夫婦の傍に居並ばせて久しぶりに打ち揃ふて、樂しき晩餐に就きぬ。

かくて樵夫夫婦は、再び子供を膝下に置きて、いと幸福なる日を送りしが、其幸福も金のつゞく間つゞきた

れども、金盡きければ前の如く哀れとなり、再び子等を森に棄てんヿを思ひ、遂に再び談合して、今度は最初の處よりも、一倍遠き森に伴れゆかんヿを決しぬ。此度も誰も知るまじと思ひき。然れども終夜寢ねずして耳を澄したりし膝坊主は、再び之を洩れ聞けり。されど渠は、既に前の出來ばえによりて、痛くは心を惱まさず、例に由て朝蚤く起き、川ばたに下りて、小石を拾はんと思ひたるに、今朝しも戸は二重の錠おろされて、小さき腕の開くべくもなかりければ、膝坊主はハタと惑ひたるか、如何にすべきと思ひ煩ふ折しも、母は朝餉にとて、パンの一塊づゝを、七人の兄弟に與へければ、膝坊主はパンによりて、工夫を運らし、忽ち其一塊を前の小石の如くに割きて、道に散くべき妙計を案出しければ、他の兄弟が飽かず食ふに引かへて、渠は竊に袂に藏し、之を割き、腹は鳴るほど饑えたりしかど、七人の生命の種子と、忍んで一片も食はざりき。

渠等は再び送り出されぬ。兩親は前より遠く、前より深き奥山に渠等をつれゆき、渠等が柴拾へる裡に、忍び歸りて、子供ばかりを森に殘せり。兄弟は前の如く聲あるかぎり泣き叫べり。膝坊主は例の手管を施したれば、少しも驚くヿなかりしが、さて兄弟を導きて、愈ゝ山を出るヿゝなりて、道のしるべを探索しけるに、コハ抑も如何に置きたるものは、なくなりて一片もなし。是は石ならぬパンなりければ、盡く鳥に啄ばまれしものならん。流石智慧者の膝坊主も、餘りの事に呆れ果てゝ、暫らくは立往生の躰なりければ、兄弟等は愈よ絶望し、斯かる恐ろしき山中に、虎狼にも喰はれよと、棄てられたるものと思へば、あるにもあられぬ恐ろしさに、又湧き返りて聲を立て、其中に日は暮れて、夜は來り、往けば往くほど、愈々奥ふかく迷ひ入りつ、あやめも分かぬ木立の中に、梢を振ふ山風の音、宛然

狼の怒るが如く聞ゆるに、今か狼の出で來らん、今か狼に噛み殺されんと、兄弟は生ける心もなく、立すくみて身動きもせず、互に物も云はざりけり。斯ては果じと、膝坊主は頭を傾けてハタと心づき、くらがりを手探り〳〵、程よき樹にさぐりつきて、固より慣れしとて、猿かの如く樹によぢのぼり、時の間に梢に出でゝ、助かる道もなきやと、方々を見回したるに、遙かあなたに、果して一點の燈、ちら〳〵風に搖きて見えければ、樹より下りて、兄弟を慰め、一同手を携へて、燈見えたる方角に向ひてたどりしほどに、樹の間より火影見えければ、生き回りし心地して、急ぎ燈の家に向ひぬ。渠等が其家につきし時は、最早一歩も歩めぬばかりに饑え疲れてありしなり。渠等は、今火影の家に入れり、然れども是は果して何人の住む所ぞ。

外國戻り

筑峯女史

心つくしの島原わたりのいとあはれなる賤が家に母子二人わび住へるがありけり。母はむそ路を六ッ七ッ越の白雪つむ年のさらでもよはる老の身に、ひゝのたつきをくに病みて次第に重もるいたつきを、見るに悲しき乙女子はいかがなさんととつをひつ思案にくるゝ夕月夜の軒をもる影あはれに、むぐらにすだく秋の虫の聲をきくにつけても、すぎこし方忍ばれ、しめりがちなる親子の袖はかはくまとてなかりき。乙女はつらつら思ふよふ、たとへ良醫はあるとても藥のしろをいかにせん、今は賣るべき品もつきはて、日毎にせまるくるしさを、なやめる母にしらせたらんには、又いたつきの重りやすべし、たとへこの身はうゆるとも今一度の本服をと、朝夕神にいのり、いかがなさんと獨り心

をくるしむるうち、ふと心に浮びしは、かくてすぐるも母の病の癒ゆべきやうなし、ほのかに人のうはさを聞くに、遠くもあらぬ長崎は諸國の人は云ふに及ばず、外國人も住み、何を爲すとも意外の利益を得べしと、もよりの娘などこの間すでに稼ぎにゆきしとなり、やめる母君一人をき、看護もなさでいで行は、いとも不孝にはあるなれど、このまゝにては醫藥も得られず、金だにあらば療養も出來、世話する人もあるべし、さなり〳〵とて、胸にとひむねにこたへ、周旋人の宿にゆき、前約金を受取り來りて置き、ある夜の事なりしがね入りし母の枕べをそつとうかがひ、目さめぬうちにと一通の文に金をも添へてさしをき、ぬけ出でつゝ、かたぶく月に住みなれし我家の影をすかし見ては乙女心の氣もみだれて打伏し泣きしが、かくてあるべきにあらねば、しばしのいとまをたびたまへと、今更の樣に思はれ夢路をたどる心地ながら、早く行かずば周旋人の待らんと急ぎけるに、ほどなく周旋人の宿につき數日をへて、所々方々よりつどひ來し多くの娘等と、一同に船にのり、長崎に着きぬ。さて長崎にてよき奉公口を求めしが心のまゝにははかどらず、周旋人の話に外國に行きなば金錢多く得らるゝのみか衣服調度も望みのまゝなりとの事に、すゝめにほだされて又もや以前の娘等と共に出立つ事となりしはよけれど、如何なる譯か知らねど、一同は行李の中に身をかくし黑船へ運ばれける。黑船にうつれば、行李よりは漸く取出されしが、こはいかに常人の入るべき室ならずして石炭もて充ちたれば、薄暗らきが上にきかいの響きかまびすく、非常の温度にて精神みだれ、夜るひるのさべつもなくまどろめば、時々云ふも恥かしき無禮にあひ、腹立たしけれど爲すべき樣なく、早く港に着けかしとそれのみまちぬ、かくて幾日かの海路をたどり、やうやく港へ着きしとの知らせに、一同喜び勇

みてよみかへりたる心地し、いそぎ陸に上るに、思ひきやすぐさまあやしの家に伴はれ、周旋人は今までに打て變り、多くの金を費してはる／＼この地につれ來し上は、あすともいはず今よりぞ我等がさしづに隨ふべしといふのみか、宿の主と覺しき老婦も言葉を添へていともきびしく言渡しける。乙女は胸とゞろきて咄しをきくだにいまはしければ、死すとも隨ふまじと心をきわめ、女心の一徹に周旋人も宿の主ももてあまし、一間へ閉こめ食事さへ與へざりければ、乙女はあるにあられぬ悲しさ、何とかして遁れ出でんとのみ工風をこらす其の内、雨風あらき夜を幸ひ、付添人の心ゆるせしひまに、忍び／＼て出で、日々のせめ苦に身躰つかれて歩みかねたるを己と心をはげまし、漸々海べにたどりつき、いづこを見ても知らぬ地のよるべなき身をかこちつゝ、ふる里のそらをながめて母を志のび身をくやみ、思へば悲し口惜しゝと、たゝずむ間に、後とべを見れば、あら悲しや正しく追人の者と見え、燈火打ふりこなたをさして馳せ來る樣子、捕はれなば又一層の憂めに逢ふべしと、さかまく浪に水音高くとび入りける。暫らく夢見し心地して覺めてあたりを見渡すに、外國人に取り卷れ身は臥床に橫はり藥の手當もあるより、始めて救ひ上げられたると知りぬ。やがて通辨らしき日本人出て來て種々の問ひを受け、本國より誘ひ出され死を極めしまでの樣子を物語れば、頭立ちたる一人の外國人通辨に向ひて何か云ひふくめけり。聞けば乙女が追人と見しは香港政廳の巡査にて、入水せしと見るや巡査も飛び込みて救ひ上げ、今は屯所の一室にある事分明なりしかば、此の上如何なり行く事かと恐る／＼通辨に問ひしに、頭立ちたる外人より命を傳へて日本へ送り歸へし遣すべしとの事に、乙女は天にも上る心地し、外國人もかくまでに物の道理を辨へなさけ有者もありけるよと喜ぶことかぎりな

く、四五日間を屯所に送る其の内に、郵便船にのせられ、漸く日の本の南の端の長崎に着き、警察に引渡され、またの恵になつかしき我家里に到着なし、戀しの母親に再び遭ひて孝行を盡しつゝ、一心に何くれとなく稼ぎ、其の日の烟も立ち、母の病ひも癒えゆきて、いとも樂しく世を送る身となりつると語れるを聞けるがま、女子の身としてなまじひに外國なんどへ渡航なぞすまじきことゝこゝにかくなん記し侍る。

チエレー城下の盲女

富士子譯

その三

九の度
うつかねの音は樂しけに　霞破りてほからかに
響き渡りぬむば玉の　曉やみもほの〴〵と
峯の朝日にあけぬれば　ね亂れ髪をかきわげつ
めさめし二つのいほの中　二人の乙女はいみじくも
變り變りし姿にて　けふのこの日を迎へつる
かな
けふの日の
女皇は笑みつ祝ふなる　へつらひ人にとりまかれ
十字の志るしあるは又　冠をつけつさく花の
匂ふか如きあや衣　き飾り盡しかゝやける
雪の面を幾度も　鏡に照しゑばしだに
休ろふ事もなかりけり
荒れ果し
よもぎが宿に住わぶる　外見悲しき盲目なる
乙女は榮の冠をも　香り床しき花をだに
身にまとはねど閉果し　見えぬ眼に立上り

抽斗あたりさぐりつゝ　紅そめしすり衣
志かと手に取り胸もとに　いだきながらも打ふしぬ

一人なる
娘はあはや大空に　輕く舞ふごと浮き立て
接吻と唱歌にとりまかれ　朝な／＼に捧ぐなる
み祈りさへも忘れけり

外にまた
一人の娘ははかなさの　涙の露を三日月の
眉にこもらせ雨の手を　合して牀にひざまづき
出づる息さへかすかにて　おゝ神樣よ／＼
ゆるし玉へといのりけり　祈りし時に弟は
戸を開きつゝ歸り來ぬ

盲目なる
若き乙女は弟の　手にすがりつゝ生緊る
草ふみ分けてしづ／＼と　會堂さしてあゆみけり
うすき日影に野も山も　霞棚引き吹く風に
折々送る道のべの　桂の香り何となく
身を弱らする心地しぬ

眺望よき
城のあたりはいと古き　數多の墓の並居て
飛騨のたくみにあらぬ共　大理の石にほりなせる
志るしの文はいや高き　位に誇るさまぞ見ゆ
岩かくれにさゝやかの　御堂たちけり山田もる
槇の板屋のはるか上に　そばだちて見ゆその聖き
堂の頂き眺むれば　幾年月の秋風の
吹きすさみけん青雲に　聳ゆる塔のいろ黒し
そが參りにはみさごどり　舞ひつ飛びつ鳴き渡る

「やよボーロ
そのさはがしき言の葉を　止めてよ今や我々は
何地を行くか山阪を　登るならん」とマガレット
問ふに答へて弟は　「然り姉上我々は
早くも旅の終りしを　知り玉はずや姉上よ
御堂の塔に海鷹　鳴き叫ぶなる其聲を
きゝ玉はずやのそ姉よ　思ひ廻せば過し年
父君病に臥し玉ひ　其枕邊に看護せし
臨終の際に「わが娘　おゝなが父はよみの國
いまや行くらん行水の　歸らぬ如き我が生命
唯々たのむ幼き　弟を助けいたはれ」と
語り玉ひし夜半の事　覺え玉はん我々は
こゝろもかぎりとなきし時　折しもあれやあやなくも
音づれてなく海鷹どり　共になく音を添えにけり
父のむくろを人々は　その時こゝに運れ來り
又と歸らぬ遠つ國　暗のあなたに送りにし
彼所に墓の見ゆるよな　手向の十字しかすがに
昔をかたる思ひしぬ。　など姉上は我が手をば
堅くも握り玉ふぞや　來り玉へよ花嫁は
もはやきまさんおゝ姉よ　震へ玉ふは何事ぞ
めまひのするや父をしたひて」

めしいなる
娘は弱りたどりつゝ　たどり／＼て歩みしが
父の御墓にあやなくも　あやしの聲のきこゆ也
「やよわが娘何事を　爲さんとする」とまさしくも
此の世の人の聲すなり　恐れわなゝき乙女子は
おとすざりしつ氣も狂ひ　我を忘れし心地して
たゝずみ立ば弟は　いざとく／＼と會堂の
門をひらきて進み行く

不幸きはまる乙女子は　聖けき堂の道のべに
繁る桂樹手折りつゝ　ボーロの話きゝながら
あやに賢こきみやしろの　弓形の戸に飾りぬる
金白銀細糸工　貴き冠に乙女子の
頭はふれつはや内に　はいりて行ば乙女子の
心いつしか進み立ち　恐るゝけはひ絶てなく
祝の席につきにけり　古きみ堂の薄暗き
明方近き折なれば　二人の姿明らかに
見えずなりけり暗にまぎれて
婚禮の
たのしき鐘はわし引の　山の奥にも動きなき
岩のうつほの底にまで　響き渡りぬほがらかに
峯の朝日は輝けど　小雨催すけふの空
一村雨とふりしきる　おくれじとてや賓客は
はやくも集ひ來りつゝ　けふを晴れとや村人は

老も若きも集ひつゝ　間もなく着ぬ婚禮の
樂しき群はこゝの御堂に
實にや
欺僞深き其人に　など快樂のあるべきぞ
見よや眺よバプチスト　かちのこの日に口なしの
花さかぬごと一言も　物いはずして立てけり
昨日も同じ姿にて……　唯々浮ぶト者の
おうなの言葉身にしみつ　胸にこたへてたゝずみぬ
花嫁御寮のエレンラも　思は同じ胸の内
おうなが爲せし十字架の　志るしをのみぞひたすらに
思ひにくれてありしかど　集ひし人の「美くしき
嫁御の君よ美くしき　あの面よ」とさゝやける
其さゝやきをきくたびに　かはゆき胸は幾度も
動氣しぬらん美くしき　雪のおもはも今は又
薄紅のまさり行くのみ

とはいへど
其さはかしき胸の内　静かにすべき時はきぬ
そいはや既に聖らなる　御臺の側に倚の君
立給ひけり神かけて　妹脊の契り結ぶてふ
いと嚴かの御祈りを　捧げ給へり千代かけて
盡ぬゑにしを示すなる　指環を授けたまはれば
恐れかしこみバプチスト　おしいたゞきて花嫁の
指へさしけり萬代も　共に／＼と契るてふ
證の言葉一ことを　いひ終りけり其時に
「彼はまさしくかの人」と　日頃能く／＼きゝ慣れし
聲音洩しぞいぶかしや　つどひ／＼し賓客は
息をこらして窺ぬ　懺悔の室と呼ぶなる
かたへの部屋の戸は開て　盲目の乙女あらはれぬ
聲もいと／＼あはれにて　「バプチストよ」といひてけり
「わかこの生命なからんを　望み給へるものならば
聖けき水は君か爲　我この血こそよからめ」と
静に刄手にとりぬ　死の御使は必ずや
乙女を守り側近く　守りしならん行末を
共にちかひし其人に　一夜のちぎり結ばなく
結ばぬのみか今ははや　見捨てられにし此めしい
あはれうき世の悲しみの　哀のかぎり身にうけし
歎きあまりてはかなくも　無慘の刄物に火のけふり
たゝさぬ前に息絶えぬ
夕されは
めでたき節の婚禮の　歌にはあらで遠近の
空もあはれに深み草　深き思のいろ見えぬ
千草の花のはかなくも　暫し盛に咲匂ふ
花もて棺飾りつゝ　御堂をさして村人は
かつぎ行きけり白妙の　雪とぞまかふ衣まとひ

村の乙女は諸共に　歎きになげきなきがらを
よみの界に送りけり　棺の主は淋しくも
獨り越らむ死出の山　實にも此日は天地も
あはれ催しいづ方も　笑さへ洩すかげもなく
否とよ否と口々に　歌ふが如く見えにける哉

「玉ほこの　道はなけゝよ
かなしめよ　涙のもをば
身にまとひ　花にもまさる
美くしき　棺の主は
天津國　かぎりなき世に
とつくなる　歎けよ〳〵
美くしき　其なきがらの
けふはしも　通り行くらん
ところあたりを」

（終）

繪畫

無聲詩話（十六）

天下の畫格狩野氏土佐氏の規摸中に跼るに當り、奮然蹶起して大旆を洛の美術郷に翻へし、畫閥打破の巨人として、日本丹青界の新潮流を迸らしめたる圓山應擧は、寫實に由て其新機軸を出したりき。彼は古來の畫祖が各畫法の折衷に由て新機軸を出したるを見、其已にほゞ各畫法の折衷し盡くされたるを見、而して實物の摸寫たる古畫を粉本とするは直に實物を粉本とするの勝るに如かざるを知り、乃ち古人を師とするのみに滿足せずして造化を師とせり。古圖を臨仿するのみにあらずして自然を臨仿せり。

故に彼が畫風には自ら新意を拈出すべき自由あり

き。洛の風物に涵養せられて温麗にして秀潤、狩野よりは軟に、土佐より活けり。而して其氣骨に於て少しく缺くる所のものあるは、豈彼が京都の畫家たるに因



源應擧

れる乎。抑江戸中世の靡々時代に逢ひしに因れる乎。」

彼初の名は岩次郎仙嶺、字は仲選、主水と稱し、僊齋と號す。丹後の農家の人なり。初め石田友汀に狩野畫を學び、古名畫を摸して拘る所なく、好んで花鳥虫魚の寫生を事とし、遂に一格を開きて天下の畫風を一變するに至りぬ。寛政七年七月十七日沒す年六十有三。」

傳ふ、彼甞て幽鬼の圖を作るや一少婢薄暮に之を見て爲に氣絶したる事ありと。其巧妙にして眞に迫りたる事、以て想ふべきなり。而して其畫は死したる少女の顏貌を見て作りたるものなりと云ふ。這般の工夫にして若し其極致に至りたらんには、泰西畫の長技たる寫實と東洋畫の長技たる神韻とを兼ぬるに於て、亦何の難きことかこれ有ん。

圓山派は遂に狩野派土佐派と相並らんで其畫統を京都に垂れたり。長澤蘆雪、駒井原琦、渡邊南岳、山口素絢、山跡鶴嶺、森徹山、西村楠亭、奥文鳴、吉村孝敬の如きは、其徒中の傑出したるもの。

蘆雪は山城淀の人、名は魚、字は氷計。應擧に學びて新意を出しき。

家政

夏の用意萬端

出來事は、盜賊の夜來るが如く、今日來るか、明日來るか、又た來らざるか、少しも豫定し難きものなれ雖、心得たる人は、何時之に出合ひても慌てふためきて、醜躰に落ち入らざる樣、常に心得居るものなり。記者の知人に、備中倉敷に代官を勤めたりし人あり、封建の時代の事とて、人を殺ろし殺ろさるゝ事はめづらしき事にあらざりしが、何かの事より、爭ひ起り、敵黨のために、夜中不意に家をかこまれたり。さすがに敵の人々も目的は代官其人にあるが故に、罪なき婦人迄も殺すには忍びざりしと見へ、婦人のみは後門より逃ぐるとをゆるせしが、男子と云ふ男子は悉とく殺すべしと云へり。代官の婦人は、常に心得の善きを以て聞こへし人なりしが、其頃の事とて、男子も皆髻を結びしが故に手早に、當年十七才になれる男子の髻、前の元結を切りて己が掛けたる、襟裏の赤きものを引き割きて之に卷かしめ、下女の中に混せしめて逃れおゝせしめたり。後に此事衆に聞こへて、賢女の賞まれ高かゝりけり。之頓才は兼ねての用意あらざれば如何でか之を爲し得べき、是れを聞くに付けても、兼ねての用意と事に臨みてあはてざる事の大切なるを知るべきなり。例へばらんぷに火のうつりたりとて、慌つる時は水をかけなどして、反て火勢を强よむる事あり。之れには、ふとん毛織ものを以て覆ふべき事を兼ねて心得、或は傷を受けたる時は、慌てずして傷をあらひ、一方に醫師を招く事を忘るべからず、近所の火事の時のため、は兼ねて大切の品を集め置くか、もしくは、大切の品を一々書き付けて、一つ〳〵之を出すべし、かくそれ〳〵の心得の大切なる。内にも之れより暑き時候

となるに付き、心得べき、一二三の事を掲げんに先づ

第一、蜂蚊にさゝれし時の心得

是れより小供が草の實を取らんとし若しくは蟬を取らんとして、過つて蜂の巣に觸れ、怒りたる蜂の、鋒先に刺さるゝとは、屢にめづらしくもあらず、夫れと知りつゝ、小供の叫の甚だしきため、隨分慌て驚き、爲す所を知らざるに至る者、少なからず、さればその注意を心得るは、無益なることにあらざるべし、もし虫にさゝれし時、住家の近邊にて直ちに、食鹽を得るの道あれば、すぐ食鹽を水に溶かして、之にぬるべし。腫痛を發せずと云ふ。之れは即時にあらざればきゝめなければ間に合はざる時は虫の刺したる處を、口にて吸ひて、毒を拔くか、虫によりては、刺したる處に、所謂劍とて細そき針を殘すが故に、之を毛拔にて拔き去り、其跡へヨヂユムチンキを塗るべし。

第二、腐敗物を食したる時

之れよりは暖氣のために、凡てのもの腐敗し易く殊に牛乳等は、過つて腐敗物を食する時は、中に恐ろしき乳酸と云ふ害ありて、胃を損ずるのみならず、人命を落すべければ凡て腐敗したるものを食せざるこそ肝要なれども、若し腐敗したるものを、過つて食したる時は、一時も早く吐瀉して、胃と腸の中をあらひ、清よむるこそ肝要なり。吐するには、指を口中にさし入れたる舌の根を壓すか、鳥の羽を以て、咽をこする時は、如何なる人にても、容易に吐し得べし。下痢するには、賣藥所にて大黃丸若しくは蘆會丸を兼ねて求とめ置かば、不意の間に合ふべし、その飲み方は、賣藥の處方紙に記しあれば別に記るさず。

蝮蛇の害に遇ひし時

夏分は何れの地にても、蝮蛇の害は恐ろしきものなるが、殊とに農家にては、夏の草取にて、山野に入り、その害を蒙る事少々にあらず。或る人はハブ草を塗る

を宜しと云ひ、或る人はなめくじの黒燒を宜しと云ひ、或る人は野びるの根、若しくは柿の澁を宜しと云へども、之れは記者の保證する處にあらざれども、學說として眞の効能あるは、蝮蛇に嚙まれたる所を能く〳〵口にて吸ひ取るか、或は思ひ切りて小刀にてその傷口を切り去り、淸水か、五百倍の石炭酸水か、五百倍の昇汞水か、硼酸水にて洗らひ、後にヨードホルムをつけて上を布にてしはりをくべし、此の藥は、何れも劇藥にて、誰にても求むるわけに行かざれば、兼ねてかゝる時の用意に、懇意の醫者より、もらひをくか若しくは、その醫者の證明書を得て、賣藥屋より購なひをくべし。

水に陥りたる時

冬中疎遠なりし冷水は、之れより時を得て家々人々に親しまれ、殊とに小供によりて好のまれ、弄あそばる、川中に落りし小供の出來事、游泳中にて、俗にカラシナへとてすこみの來る談話の新聞紙上に記載せらるゝは、遠きにあらざるべし。かゝる場合には、勿論第一に、醫師に走しらしむるとは肝要なれども、醫師遠ほき所にては、先づ患者の衣服をときて、殊に胸部喉の處の、しまらざる殊に注意し、若し水を飲み居らは、足を上にし頭をさげて、水を吐かせて後に前半身を稍や高くして、平らに臥さしめ、アルコール性の者一サジ位を、三四分毎に三四回を與たへ、フランネルの切を熱湯にひたせしものか、德利に湯を入れしものか、溫かゝき米飯を、切れにてつゝみしものを以て、胃部(所謂みぞをちの所)を溫むべし。又た傍らの人々は、成るべく靜づかにして談話をさくべし。

蟬を取らんとして落ちし小供

蟬を取らんとして落ちし小供に用ゆる療治も、猶ほ前と同一なるが、骨を違がへたる時は、その處を手にてもみ、傷を受けたる時は、出血の甚だしきため、貧血

して死に至らざるため、そこを括り然る後前の手當を爲すべし。

雷に打たれてさしこみし時

雷に打たれてさし込みし時も、前への如く先づ喉と胸部をゆるめ、一二分毎に冷水をちよく一杯づゝ七八度與たへ、少しく元に復したる處にて、アルコール性のものをサヂ一杯位づゝ、二三分間を隔だてゝ二三度與へ、又た前の如く胃部を温むべし。

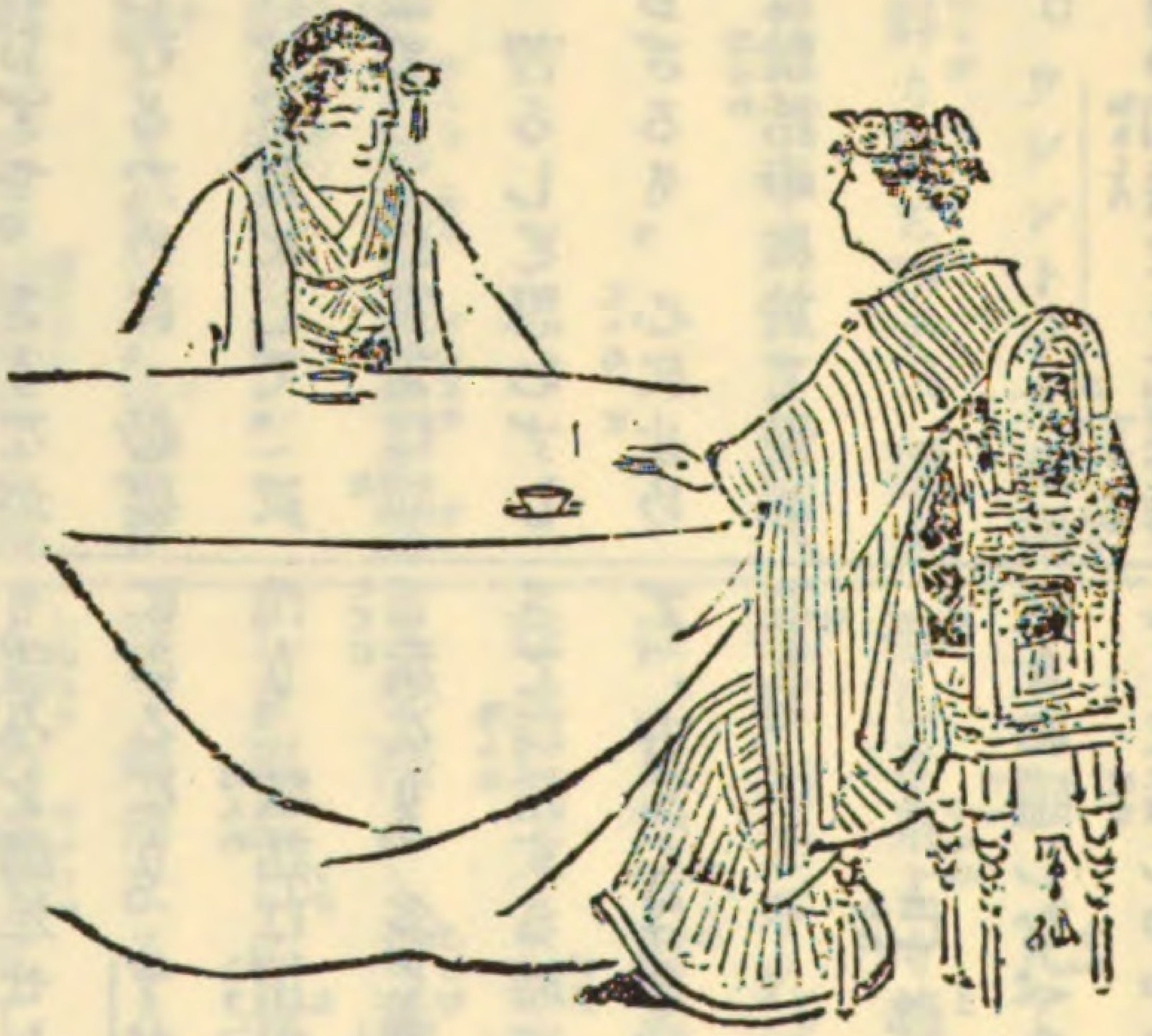
其他注意すべきかど／＼

其他平常心がくべき事は一二にして足らざれども、長く閉ち込め置きし古き家、又は倉には、蠟燭の試驗を爲ずしてそのまゝ入るべからぞ、蠟燭の試驗とは蠟燭の火を棒の先に付けて入らんとする室内に先づ入れ火の消へざる時は安全なれども、火の消ゆる時は、炭酸がすのあるの證なれば、先づ四方を明け、廣ぐるか、明ける能はざる所なれは石灰水を散布して、炭酸がすを去らしめ、然る後之に入るべし。又た暑さの時に、水氣のあるものをひや／＼してよきと心得、濕めりたるものを身躰に付くるは、大に害あり。風の流通の甚だしき處に、小供を置き、若しくは、自分にて、假寢して感冒にかゝるべからず。彈丸をつめたる鐵砲、若しくは激藥、又は刄ものを、小供の手のとゞく所に置くべからず。蠟燭に點火して蚊帳の近くを通るべからず。道の曲り角を行く時は前より馬車等の來らざるや否やを、聞きすまして靜づかに曲るべし。夜中寢冷すべからず、過食してコレラ病を起すべからず、不潔なるべからず、來客に當りて慌てさる樣、腐敗せざる物品を常に少しづゝ貯ふべし。此れ等は不意の出來事と云ふよりも、兼ねての用意と云ふ事適當ならんも、主婦たるもの母たるものゝ最も忘るべからざる所な

會話の心得（續）

諂諛

隣家へ一尾の魚を贈りて、隣家よりその返禮をなさざればとて、その隣人を惡むが如き人あらば、衆之を卑しむべき人と云わん。諂諛を他に呈する人は、魚の返禮を望む人に異なりたる處なし。諂諛する者は、其諂諛がその本人に達せざる處にては、之れを云わず、多くは公會の席か、若しくはその友人か、本人に電信の傳たわる處にて之を語る。意はその送りたる言に對する報酬を得んとするにあり。望む處の報酬に別てそあれ或る人は高地位を得んと欲し、或る人は金錢の惠を得んと欲し、或る者は一杯の酒、一塊の寳を得んと欲し、若しくは己れの評判を好くせんと欲し、各々報酬を望まざるはなし、かりにその卑劣にして、人を害するとは問はずとするも、己れの品格ををとし、己れの性質を下げて、己れの不爲となると少々にあらず。人に諛ぶると云ふことは、恰も人より諛を求むる看板を出だすと同一の醜事にして、一方より云へば一種の賄賂なり、賄賂を取る人を世人は新聞紙上にて嚴びしく筆誅するを見れば、賄賂を呈



する人は如何に醜ぐるしきや、その醜るしき賄賂は覺へず知らざる中に、己れの言語に出だす習慣となりて、世人の笑となるは、恐るべき事にあらずや。さりながら、失望したる友人を慰め勵げましむるために、必要なる賞言は、諛に似たれども、之れは賞言にして、又た種類の違ひたるものなり。其證據としては賞言は誰れ一人の證人の聞けるものなくも、苦るしと思わずして語り、その賞言の返禮の返り來らざるも、心に止めざるを見て知るべし。されば諂諛は談話中に於て最も注意すべき一なり。

話　柄

一種の人あり、人は笑らはざるに自ら面白そうに長談しを爲し、人はうるさくして困るにもかまわず、いつも〱同じ談しを得意となりて語る。彼は談話を好み、談話を爲さずしては居られざれども、其の人に忌まるゝの原因は、識見の狹まくして、己れの知りたる事、面白しと思ふとが、人の知りたる丈け高尙ならず、發達せざるによるなり。如何にせば、人に好かれ、己れも望みを滿足せしむるを得べきやと云ふに、實に讀書にあるなり。マダムスタール女史が、讀書は全き人を作り、談話は用意ある人を作ると云ひしは、味ひ深き言葉なり。多く讀みて、先づ己れの腦を滿たしをき、さて談話する時は、人の經ろしむるが如き談話は出でず、古るくさき話しは、自分より恥じて語らざるものなり。

己れの事を語る

次きに謹しむべきは、己れの事を話しの問題とし、若しくは話しの中に挾さまざるを可とす、世の中の人は、大凡は己れを信ずること、分に過ぐるものにして、謙遜せりと云ふ人にても、その謙遜を一種の誇として、鼻を高くするものなれば、己が事を得意になりて語る時は、聞く人はそれよりも尙ほ上手の人なるが故に、心

の中に不愉快を抱くべし。幸ひにその人謙遜にして、心中に不愉快を感ぜずとするも、己れの事を語るは失禮の事なり。己れの事は通常のヿを語るさへも失禮なるを、まして己をえらきものゝ如く談ずべからず。己れの賢を云ふ人は、その云ふ處の賢こき分子を除ぞけば、後は愚なりと廣告するか如し。ワシントン大統領を止めて家に歸るや、多くの人は群り集ひて、種々の事を問ひ掛けしが、彼は己れの爲しゝ事に付きては、一言もせざりしと云ふ。

注意すべきヿ二つあり

談話に注意すべきヿ二つあり、一は言語餘り形容に過ぐるか、形容足らずして談話の系統を亂すヿにして、他は無益なる話を爲すに由りて、聞く人をして忌みきらわしめ、その人が集會に出づるか、なを訪問する時は、他の人々が逃げ隱くるゝに至る事、人に嫌らわるゝ談話を爲さんと欲せば安きヿなり、成るべく乾燥無味の事を、長が〳〵しく話し、人の笑ふ時には、口を閉ち、人が啼く時には、大聲を發して笑ひ、無學なる人に對しては、學問の話しを爲し、道德の高き人に、浮きたる話しをなして、凡ての事調子に合わぬ様にすべし。

凡て心の清きを要とす

悪しき泉より善き水は出でず、汚たなき心より好き言葉は出でざれば、人に好かれ人を益せんと欲する人は、只た言語を謹しむのみならず、先づその心を革たむべし。人を嫉むが如き言葉、人を悪しさまに言ふ事。人を陷るゝ言葉、或は譏り、誹り、怒り等の如き、悪しき事は口の先きに上らざるべし。我等が人に對する時、如何なる人が最も交際して心地よきやと云ふに、心中の清潔にして、且つ快愉なる心持ある人なるを知らば、人か我等と交際する時も、己れか人に付きて感んぜし如くなるを思ひて、心中の改良を務むべきな

り、又た快活なる風采、爽かなる談話の聲は、共に人を引き付くるに足るべければ、之を養しなふ事も、亦た大切なる事なり。之れたゞ人のためのみならで、心を清よくし、談話を愉快にする事は、己れのためにも快よきものなり。

メーソンの談話規則

有名なるメーソン氏はその弟子に與ふるために、左の談話規則を出したり。

一、友人は、書物と全じく我に益ある者を撰ぶべし。

二、若し汝の友人が、汝すらも優等のものならば、萬事を之に聞き、注意深き聽手となるべし。友人が汝よりも劣りたるものならば、彼等を益することを勉むべし。

三、もし他人と談話せる時、談しが中絶したる時は、汝注意して、廣く一般に渡りたる事を、問題として出すべし。誰れか之に和して談話を接ぐべし。

四、人と談話中に得たる所は、學問の一として、記錄簿に止むべし。之に反して、無益のとは、記臆に入れざる樣にして腦を疲らしむべからず。

五、集會の席に出でゝは、多言なるは勿論惡しけれども、無言なるも又た惡しゝ、無言なれば人に惡くまるの原因なり、無益の人と下げしまるゝの原因なり、時に應して、適宜に語り出づべし。

六、人が他人の談話に加入するに慌忙つる勿れ。面白そうなることを話すも、その人が全く云ひ終らざる内に、贊成すべからず。又た善き事なりとも、全じ集會にて全じ事を二度と語るべからず。

七、人の言に過失ありと思ふ時も、輕ろ〳〵しく之に反對すべからず。その人は又た一種の眼光を以て、之を見る處ありて云へばなり。

八、仲間の人々が卑劣にして俗なる談しを始むる時

は若し一言にして之を打ち破り得ると思はゞ之を破ることを試みよもし、能はずは沈默によりて破るべし、之れも出來ずはその場を退去せよ。

九、汝の能力若しくは汝の上手なる處を見せかくるが如き談話をさくべし。

十、己れに關係もなきが如く見ゆる事も忍のびて聞く中には何かの益する處あらん。

十一、洒々落々として城郭を設けざれば人も亦た己れに對して、隔だてを爲さずして互ひに善き考を出だし合すを得べし。

（終）

危險なること　やぎ生

西も東も知らざる小供の爲すこと程危險なるはなし。火を見ても其燒けるものなるを知らず、刄物を見ても其切れるものなるを知らず、又如何なるものを見ても、なんの思慮なく、笑てこれを迎ふるなり。されば父母及子護りは、小供に危險なることを、爲さしめざる樣注意すべきなり。これに就ては本誌に於ても、度々述ぶるところにして、讀者に於ても定めて讀倦き給ふならむが、承知しながらも、まさかに怪我はあるまひ、此位なことは大丈夫、左樣に危なひ〳〵といひては育てられずとて、守らざるものあるもの〻如し、故に余に於ても、亦これを繰返すの必要を生ずるなり、其心して讀過せらるべし。

扨何如なることが危險なるかといふに、世間の人すべて危險なりとすることは、誰も爲さしめざれば、怪我過の生ずることもなし、却て危うく無さゝうに見へて、其實危險なることあり、よく〳〵判別せられたきものなり。

某氏の小兒、物置の隅にありたる大釜を指し、何でも中へ入れろとて泣きしかば、親は子に甘く、よし〳〵

とて中へ入れしに、小兒は嬉しがりて躍り上り、釜を打ちて音の出るを、何よりの音樂と喜び居たりける、税經て此釜を用ゆることありて、これを持出し、勝手にて湯を沸せしに、小兒は斯くとも知らず、勝手口に常の遊び釜ありしかば、片足を入れしに、忽ち燒けたゞれ、ワッといひて悲鳴したり、親は驚きて飛び來り介抱し、半年ばかりにて漸く癒へたれども、步行の工合は、常の人とは異なりけり。

今一つは、ある小兒偶母に渴を訴へしとき、手近き所に茶碗のなきまゝ、土瓶の口より飮ませしに、小兒は不思議さうに飮み居たりしが、其後は茶碗にて與ふるも飮まず、何でも土瓶の口より飮ませよとて承知せず、遂にこれが習慣となり、あるとき母が庭へ出たる留守に、火鉢の邊に這ひ行きて、ぐらぐら沸きたる土瓶の口より飮み、舌を燒きはらし、言語を發する能はず、醫師も六ヶ敷いひて、今尙治療中なり。

かゝる過の生ぜしも、初め用法を誤りしより起りたるものにして、一寸したることながら、飛んだ過を醸せしなり、子を育つるには、よく斯くの如きことに注意し、安全に成長する樣、心がけ給ふべし。

婦女手藝案內

縫取とへム縫

縫取とへム縫とは女子、手藝中最も緊要なるものにして、殊に縫取の如きは、美術的なるものなれば其區域も廣く、小は「ハンケチ」の縫摸樣より大は衣裳、窓掛、器具掛等の裝飾品に至り、縫摸樣が緊要の位置を占めざるはなし、近來は髮具にも縫取の流行を來し、幽禪縮緬に縫取したる手柄等行はれ、半襟に縫摸樣あるが如く一般の流行となれり、其他種々なる美術品に縫取適用せらる、されば縫取の方法を少しく記すべし。

縫取には種々なる形式あり平縫或は押縫或は鱗縫と言

ひ其他樣々あり、先づ縫取を爲さんとならば其の施さんとする布帛地に其布帛地と同色の胡粉を以て下書を描き（譬へば白地なれば白の胡粉を用ゐ綠地なれば藍又は綠胡粉、紅地なれば朱又は紅胡粉を用ゆ、これは縫取出來上りの上布帛地に痕跡の殘らぬやう成るべく同色の胡粉を用ゆるを要す）其下書の通りに縫取り行かば、其縫取に過誤又縫面に傷を生ずるやうの不恰好の出來あらざるべし、下書も縫取術熟練するに至れば、之を用ゆるの要なしと雖も、初心の人は成るべく下書に依るを良策とす、下書は胡粉を以て隨意の文字又は繪摸樣をゑがき、それに從ひて縫ひ行き、成功の後揉めば忽ち胡粉は落ちて痕なきに至るなり、扨說縫取運針の法は、其の施すべき布帛地を枠に張り（兩端を板にて強く引張り縫取を爲すべき所は、針の出沒自在ならしむやう下空にすべし）下書の摸樣により、布帛の裏の方より一針拔に針を通し二目又は四目飛に針にかけて表より裏へ刺し貫き、又裏より表へ刺し通し一摸樣終れば次の摸樣に移り、斯の如くして漸々縫ひ終るなり、但し一摸樣則ち一字一畫毎に必らず糸端を止め、隣の文字又は圖畫と其糸と連續せしめざるを肝要なりとす。

次にヘム縫の事を記さん、ヘム縫とは「ハンカチーフ」の緣縫を爲す業にして、之を內職として糊口を助くるもの尠からず、婦女子の職業には最も品好ものなり、而して此技藝たる婦女の手藝中最も簡易なるものにして、別に熟練の時日を要するにあらず、少しく裁縫の心あるものは、誰にても會得し易きものなり、其縫方は先づ糊氣なき金巾又は絹地の正方形なるを取り邊端より二寸程の所を縱橫共に地糸三本程宛針にて掬ひ拔ぐ、斯の如くすれば拔ぎ取りたる部分則ち糸の跡は井桁形の筋を現はす、之を糸拔の法といふ、四方の邊端に此法を施行し終り、拔ぎ取りたる糸の筋を度とし四

方より邊端を折返しざつとしつけ糸を掛け（折返すゆゑへム縫の所より邊端まで一寸となる）、之を縫臺の上に載せ、一方を確と抑え、接針（色紙針ともいふ、普通縫針より長手なるをいふ）の細きものを撰び、菅糸の二筋撚を通し、扱き取りたる糸の筋と邊端より折うたる處の地とを、最も細密にかゝり確と糸を引き締むる時は三角の穴を生ず、又四隅の四重となる所は、切合せて二重にし、縁を折込みてかゝるべし、四方をも斯の如くして、始めてヘム縫出來し得らる、熟練せざる中は成るべく木綿地に試み、充分腕に覺を附するに至らば、甲斐絹又は羽二重其他上等の布帛地にヘム縫を試みて可なり、此手藝は最も品よきものにして、熟練に至るも容易なれば、宜しく婦女の爲し試むべき業ならずや。

養蠶術（續）

今號には蠶種取扱の事を記さん。

蠶種の種類――蠶種は卵心則ち内容物と外皮即ち卵殼の二種より成る、而して前號に陳述せる蠶兒に春、夏、秋及び四化蠶の別あるが如く、蠶種にも此種の三別あれども、蠶兒蠶種とも春、夏、四化蠶の別あるのみにて、秋蠶なるものはあらず、即ち其三別は春蠶（一年に一回春季孵化するもの）夏蠶（一年に兩度即ち春季に孵化して蛾となり、又た其の卵の夏期に孵化するもの）四化蠶（春夏秋冬孵化するもの）なり、而して秋蠶とは夏蠶種の春期に孵化すべきものをば、人工をもて其孵化を延期して、夏期に孵化せしめ、熟蠶の後繭となり蛾に化せしもの産卵が再び孵化したるものに附したる名稱なり、而して蠶種の孵化を延期せしむる方法は、蠶種を寒中より冷氣を持續せしめて、春暖の時候

に觸れしめずして孵化せしめざるをいふ、年熟法即ち催靑法と反對の方法にして、山腹若しくは山巓の冷所に穴を掘りて、其中に蠶種を貯藏すれば、何時迄も蠶卵の孵化することなし、貯藏所の最も有名なるは、信州の風穴と稱する穴にして、其穴底より冷風の吹き出づるを以て此名ありと、貯藏所の宜しきこと餘國其比を見ず、此穴は寒冷にして空氣の流通自在なるが故に、蠶卵を孵化せしめざるのみならず、蠶種を損傷するの恐なしといふ。

蠶種買入注意――養蠶家は須く蠶種の買入に注意すべし、蠶卵の善惡を撿査するに二法あり、一を外觀上の鑑定即ち色澤、形狀、產附の正否を鑑定する事一を微粒子毒鑑定を爲すなり、前者の鑑定を爲さんには、蠶卵の色澤は地方により多少異變ありと雖も、光澤ありて原紙面悉く一定固有の色あるを可なりとす、形狀は少しく偏平にして楕圓形を爲し、中央に少しく凹所あるものを正眞なるものとし、產附の正否は亂雜不正なるや否や又は粘着力の强弱によりて知るべし、微粒子毒鑑定は顯微鏡の力を假るにあらざれば之を識別すること能はず、顯微鏡の使用法は人の知る所なれば畧して記さず、微粒子毒の有無を檢査するには、小乳鉢に蠶卵二十粒程を入れ、苛性加里の稀薄液（水百分中に二分乃至十分の割合）四滴を加へて擂り潰し、其一液滴を載板上に載せ、蓋枝を蔽ひ臺上に於て視察する時若し微粒子あらば、其有無を認定することを得べし、但し苛性加里は物質を腐蝕せしむるものなれば宜しく注意する所あるべし。

蠶卵貯藏法――蠶卵は蠶卵掛に吊し、清涼にして善く空氣の流通すべき室に貯ふべし、蓋し蠶卵の性質たる其の一化生のものは一度寒氣に感せざれば、假令如何なる高溫度に遭遇すとも決して發生せざる故寒氣に馴致せしむるを要す、且つ蠶卵は何時と雖も呼吸するも

のなれば、若し寒中桐箱等に入れ密閉すれば、一には空氣を腐敗せしめ、二には温度昇りて原紙の中央部の多少催青を生するの害あり、故に蠶卵紙、貯藏室には、人の出入起臥せず、光線の透らざる、香、臭、烟、温熱等の侵入せざる適當の室若しくば新築蠶室等を撰むべし、早孵を恐れ、若しくは晩孵を望む塲合に於ては土藏等の冷處に紙嚢に入れ吊るし置くを宜しとす、寒水浸を施せる後は同じき室内に藏むべし。

寒水浸――寒水浸又は寒晒の法とは、寒中蠶卵紙を井水に浸すをいふ、其の日限は半ヶ月一旬一週間より五日三日二日若しくは下りて二三時間に止ることあり、其目的は(一)蠶卵面に附着する塵煤皮蛾の糞尿等の汚穢物を洗ひ淸む(二)原紙製造の時使用したる灰分を除去す(三)寒中は一年中最も乾燥するの時期にして蠶卵の內容物も隨て乾燥に過ぐる故に水分を與ふ(四)蠶卵の勢力を强む(五)他國に輸送するに其土地の風土に染み慣れしめんが爲めなり、而して其方法は寒氣凝烈なる朝六時頃淸潔なる器物に冷水を盛り、暫時塵埃の沈澱するを待ち、此中に蠶種を浸し、二三時間を經て汚物の爲に器水の少々汚濁するを見るに至れば、刷毛類をもて靜かに卵面の汚物を洗ひ、再び水を代へて之を濯き乾すべし、乾かすには裏面を日光に當つるものなれど、开は餘り過激の方法なり、光線の當る障子の中にて緩に乾すべし、一週間も引續きて冷水に浸すもあり、二三時間宛屢々するものあり、それは蠶卵の性質と地方によりて異同あると知るべし。

催青法――とは靑みを催さしむる謂なり、即ち人工の温度を加へて早孵を促す方法なり、催青法に四益あり、曰く(一)天然の氣候を待たずして火力を假る故に蠶兒の發生を均一ならしむ、(二)發生を早むれば桑葉の强硬ならざる滋養分多きものを與ふことを得、(三)熟蠶期は入梅の節にして不順の氣候多く蠶兒を害するの恐

れあるを以て、一日も早きを得策とす、(四)熟蠶期と麥苅及び田植は同時なるを以て、早く蠶事を仕舞へば農事を妨ぐる事なし、其他數多の利益あれども略す。」

掃き立て——已に蠶卵青みを催し發生すること一分方に及べば、上掃を爲し、一日を置きて掃立を爲すべし、掃立法は羽箒にて原紙の裏面に匍匐せる毛蠶を其包紙の上に掃き下ろして後、羽箒の幹にて原紙の裏面を二つ程も叩く時は大抵剝落す、但し叩き方は二打に限り、幾度も叩かざるやうにすべし、若し叩き落さずして掃下ろす時は、已に卵殼より半身を出せる毛蠶と已發の卵殼に觸れて蠶蹄を毀傷することあり、扨已は包紙に掃下したる毛蠶は、其儘籾糠を布ける蠶坐の上に置きて桑を與へ、凡そ二日間計飼養するを紙掃といひ、毛蠶の上に粟糠を撒布し靜かに雜ぜ合せ蠶坐の全面に平等に散らし桑を與ふるを糠掃又は藁坐掃と稱す、前者の法は濕氣を生するの患ありといひ、後者は毛蠶を埋沒するの恐れありといへども、其使用宜しきに從へば害あることなし。

社交一斑

流行の栞

卷夢

流行の單羽物織及浴衣

單羽織——前號の紙上には紋附にては黑絽のみを案内せしが尙は更に詳記せば、絽を着する前即ち袷羽織に次ぎて着用するは羽二重、奉書、七子等を例の如く黑の三紋に染て着すべし、さて縞物に至りては前號詳記せし外銘線、節絲、綿絽等にして尙は平民的にてちよつと着せらるゝものは、瓦斯糸結城、愛知結城にして縞柄は珍奇不思議の品ありて需用者の心に應するもの夥し、但しこれは一反を二分ひて婦人の前掛一枚を取り其餘を以て羽織を製すべし、直段は一圓二十錢より二圓五十錢迄なり。但し羽織着用の順序は春季に袷羽織を着昨今の時候には羽二重、奉書等の單羽織とし、六月よりは絽の羽織、土用中は紗の羽織、土用を過くれば絽より單羽織、袷羽織と順次に逆戾するが順序なれとも、東京の如き簡易に生活する地に於ては袷羽織と絽の羽織

の二種にて四季を通すもの多し

浴衣地――男物は先づ瓦斯糸を以て最とし次は染地小形の眞岡にして白地に十の字絣、井桁絣の字絣、薩摩絣等次は細撚双子にして他は晒縞、眞岡縞、大和絣、玉川縮等(以上は六十錢より一圓五十錢位迄)、婦人向には昨年來より好評を得たる瀧川縮緬(一圓九十錢位のもの)を以て第一とし次は東上布(一圓二十錢位のもの)次は木綿縮、木綿の中形にして、年長の人には鼠地、淡鼠、大和柿、肉色、白地等の小紋形大に流行の傾向を有し、妙齡の人には同じ地質に白地紺の大形最も流行す、價は七十錢より一圓三十錢位、次は有松絞にして、これは無論木綿地なるが昨年縮にて絞り出せしより大に此方流行し本年は種々の珍奇なる柄を出せり、而して此の縮絞にて紺地に形を白抜にして單物にしたるも頗る面白し、次は白地の絞にしてこれは餘り感服仕らず、

最後に記すべきは『東世流』と稱し本年の新機にして一見殆ど本物と徑庭なし、却つて本物よりも着心宜し、價は一圓九十錢位のものにして進物用には時節柄最も適當せらるゝものと思はる、之に亞ぎて昨年來より一寸流行せし「やまさせる」も本年大に珍奇の縞柄を出し、追々需用者の心を迎ふるが如し(次號には男女單衣地の流行の最なるものと及び幽禪縮緬其他の珍柄物を繪樣によりて明にすべし)

流行の夏半襟

地質は例の絽縮緬なるが本年は絽市樂の新物大に流行の傾あり其色合及柄合を年齡によりて詳記せん

流行色は淡藤、草柳、千歳茶、淡卵、紅掛、鳩羽鼠、淡霞、銀鼠霞、本藤、貴族鼠、鼠淺黄、新淺黄、青征、利久、鼠柳、藤壁、紫鼠、藍鼠、壁鼠等にして其柄は妙齡の婦人には撫子、亂菊、踊菊、唐草菊、重れ紅葉、龍田川の類、而して華美なる形は半襟のみならず幽禪縮緬及帶地に至るまで凡て菊と紅葉に占領せられたるが如し、次に中年以上の婦人には千羽鶴、影撫子、覗菊、雪輪、水玉、輪繋ぎ、萩桔梗、蔦唐草、こぼれ梅、八重櫻、重ね松葉等の染模樣或は縫模樣とす、概するに色は淡泊にして柄は地味なる形を尙ぶものゝ如し(價は三十錢より五十錢位のものと知るべし)

駒下駄と雪駄

婦人駒下駄は頗る地味なるを尊ぶ即ち臺は二段の小町形に本天の鼻緒色に薄櫻とて紅梅色の褪めたる如き色なり又三十歳前後なれば墨流しと稱し御納戸鼠の化したる如き色を好み初冬より翌春迄は塗地にて初夏より立秋頃迄は木地を用ふ又近頃に至り東下駄も流行の兆あり、雪駄は男女ともに目下の流行品なるが抑流行を引起したるは小學校生徒なり六錢五厘の麻裏草履體操の爲めに概して十二三日より外保たず殊に下駄履きて通學する者は往返共に手に下げればならぬ不便より再び雪駄は世に出でたるなり是れより官省の昇降に便利なりとて御用商人に移り遂に一般の流行を來たして又婦人に推移りたるなり

即ち越三枚重ねにて本天八分の鼻緒色は雪の下、海老色又三十歳以上なれば黒、花色等を好さす價は七十五錢以上一圓二十五錢迄にて重に一圓の品賣行き好し近頃新橋の盛りの花に雪駄を用ふる者多し

吾妻染さ眞綿織

吾妻染浴衣地は工學士笠井愛次郎氏の發明にて幾度水に入るも變色褪色等の憂なしさの保險付にて好評を得たるが本年は木賊、星龜甲、鳴戸立田川、飛雲、小牧小紋、縮の地摺、形繼等新形を賣出したり眞綿織は木綿の如く見ゆれど稀繭にて織りたるものなれば肌付好くして汗をはぢき價も廉なるより相變らず持て囃せりさいふ

鬢插

衣服さなく髮器さなく流行は日に增し昔時に返り、玆に再び鬢插の流行を見るに至りぬ、其形は圖によりて示せる如きものを頭髮の間に插さみ、鬢の形のふくらむやうにして、髮風を美ならしむ、此器を用ゐなば薄毛の人さし雖も綠の髮房やかに見ね鬢の邊のふく／＼さ豐なるを見るべし、價は普通物銅鐵製六錢より以上金銀製望に任かす



面白き夏用柘植櫛

夏用の櫛にはいろ／＼あるべし、象牙も可なり、丁貝も可なり、最も下等品に至りては人造水晶さ稱するガラス製も可なるべけれども、昨今面白き夏用插櫛流行す、开は柘植にて製し、薄きこさ木葉又は紙の如くさ雖ども、竪に折るにあらざれば、胸を摘みて何程横にすくさも脆く破折するの患なし、模樣は勿論夏向なれば、淡泊なるを旨さし、茶具、月に鵲、若竹等最も流行の傾向を有するが如し、而して其上品なるは象牙さ雖も三舍を避くる風情なり、價は三十錢內外の由、尾張町松田白牡丹本店にて專賣すさ聞けり



蚊帳

蚊帳には流行さ申す程の事もなけれども、追々家庭に蚊帳必要の時に來にければ、聊か蚊帳の事を記さん、本年は昨年より木綿蚊帳は二割方廉蚊帳は五分高の上直なる由、却說其賣直段は木綿蚊帳（唐木綿）「五六」六十四錢位「六七」七十九錢位、「六八」九十錢位、「六九」一圓位、「七八」一圓位、「六十」一圓十五錢位、「七九」一圓十六錢位、「七十」一圓三十錢位、「八十」一圓四十錢位、「十十」一圓四十五錢位、和木綿蚊帳（丈け臨尺四尺八寸）「五六」一圓四十錢位「六七」一圓八十三錢位、「六八」二圓位、「六九」二圓二十錢位、「七八」二圓二十五錢位、「七十」二圓七十錢位、「十十」三圓三十錢位但し九寸巾緣紅木綿三ツ割角紐練繰鈕附なり、麻蚊帳は宮村さ稱するものは「四六」二圓二十錢位、「五六」二圓五十錢位、「六七」三圓位、「六八」三圓四十錢位、「六九」三圓七十錢位、

「七八」三圓七十五錢位、「六十」四圓十錢位、「七十」四圓四十五錢位、「十十」五圓五十錢位但し手織九寸五分巾綠紅布三ツ割角紐付、丈の長きを加ふれば價も亦之に準す、小兒用なる角母衣蚊屋は綠紐竹附木綿中角二十六錢位同大角三十三錢位、麻蚊帳は中角五十錢同大角六十錢位なりと

日用品物價

●白米小賣相場（一圓に付）　◉一等白米八升六合◉二等白米八升九合◉三等白米九升一合◉四等白米九升四合◉五等白米九升七合

●雜穀（一圓に付）　◉本場大麥三斗一升五合◉膨場大麥三斗一升◉肥後小麥一斗八升◉常州小麥一斗八升◉肥後粿麥一斗九升五合◉地廻り粿麥二斗五合◉播州粿麥二斗一升五合◉兇粟二斗八升五合◉上等竹林麥一斗六升五合◉中等竹林麥一斗八升◉下等竹林麥一斗九升◉上等挽割麥一斗七升五合◉同中等一斗八升五合◉同下等二斗◉常陸稗五斗三升◉山稗五斗一升◉穀黍二斗六升

●鹽（一圓に付）　◉赤穗三俵五分五厘◉大鹽三俵六分五厘◉本齋五俵七分五厘◉新齋六俵七分五厘◉古積上二俵九分◉同中三俵一分

●油（一罐に付）　◉地水八圓五十錢◉上三銘九圓三十錢◉片九圓二十五錢◉荏油十七圓二十錢◉桐油七圓五十錢◉胡麻油十圓二十錢◉星印九圓三十五錢◉阪水函入九圓十二錢

●石油（一箱に付）　◉上ホーキ一圓七十六錢◉タンク一圓六十七錢◉鷄印一圓六十五錢五厘◉上錨ロシヤ一圓七十三錢◉上チヤスタ一圓七十五錢

雜録

遺珠顆々

○服從　ジヨンソン

服從と云ふ事は大に人間の幸福を益するものなり若し我等皆盡く同等ならば我等は動物的快樂以外の樂は有せざる可し

○默　サアヂー

默する者は神明爲めに之を結く

稚遊び　其二　つね子

織紙法

春子（箱を持ちて椽に出で來り）花ちやん此間の御約束のものをお敎へしてあげますから此處へいらしやい（云ひつゝ座す）。

花子　そう嬉しい事。けふは何と云ふの？（同しく座せり）。

春子 今日は、織紙と稱ふて球繋ぎより少し六ケ敷いから能く見ていらしやいよ(方形の色紙を取り出す)。



花子 其で何にをするの?

春子 (可愛ゆき手にて剪り初めつゝ)此端を剪り放さない様にこう縞の様に縦に三分位あひだをあけて、數多剪るのですよ。見ていらしやい。

春子 そして此を紙席と云ふのです。

花子 それでもういゝの?

春子 あゝ此紙席はこれでいゝの。此度は紙線と云ふて布引きの様に細長く截つのです。(別の色紙を出して三分程の巾に細長く截つ)。

花子 姉さん其を何にするの?

春子 此度は此紙線を織針と云ふこの頭を割れた棒に挾んで紙席へ織込むのです。そうすると菱や辨慶や其他いろ〳〵美麗い織紙が出來ますよ。

花子 そう。早くこしらへて見せて下さいな。

春子 今日は辨慶に織込むのをお敎へしましよう。(云つゝ織針の先きへ紙線を挾みて)花ちゃん能く見ていらしやい。紙席へ此の紙線を一つ目落しに通すのです(通して見せる)。

春子　さあ花ちやん此の紙をあげますからあなた仕てごらん。

花子（嬉しさうに受取り）　姉さん私がこしらへるのを見ていて下さい（織り初む）。

花子　こうでしやう？

春子　あゝそれでいゝのです、そして此度は今落した目の所にこう通すのですよ。姉さんがするから見ていらしやい。

春子　花ちやんわかつて？ほら辨慶が出來たでしよう。さあ此度は花ちやんが仕るのです。

花子（姉に倣らひて次きの紙を通し）こうですか？

春子　えゝそれでいゝのです。其の通りに交々紙席一面へ織込んでごらん。そうすると美麗い辨慶が出來ます。終りまで仕なさい、見てゐて上げますから。

花子（又紙を取りて數多織込み）　姉さんこれでいゝのでしよう。能く出來ましたろう。

春子　えゝ大層能く出來ました事。それでもういゝのです。

惜分陰

（口繪の畫解き）

江戸三百年の覇儒として意氣堂々一世を風靡したりし徂徠物茂卿は、書を看て暮に向へば、則ち出でゝ簷際に就き、亦字を解すべからざるに至て、則ち齋中の燈火に對し、旦より深夜に及びて手に卷を釋かざりしと云ふ。豪傑の豪傑たるも徒然にあらざるなり。

時事一斑

帝國議會

帝國議會は十二日を以て東京に召集せられたり。十五日天皇陛下臨んで開院式を擧げたまひぬ。

衆議院正副議長

衆議院正副議長は競爭の上議長に人民方の楠本正隆氏、副議長に政府方の片岡健吉氏選に當れり。

國民的大同盟の意見

國民的大同盟の意見は立憲革新黨改進黨中國進歩黨國民協會政務調査所六派の議員により內閣員彈劾の上奏案として衆議院に呈出せられたりき。

而して議に十七日を以て上れり。可とするもの百四十四名、否とするもの百四十九名、即ち五名の差を以て否決せられぬ。

一向一背

衆議院に於ける人民方政府方の勝負は、實に數名の中立議員が一向一背する爲に決するものなり。ア、汝—一向一背!

統合的大勢

國民的大同盟の結果として統合的大勢は大に表白せられ來れり。皆非現政府意見を持するものにして、其一着に會せられたるは則ち、

全國同志大懇親會

是なり。五月八日雨を冒して全國都ての、地より都ての。階級より東都の江東中村樓に集し者數千人。谷干城子開會の意を明し、歡聲湧く間に斯く決議しける。

本集會は强硬的對外政略を執り責任內閣の定成を期するものとす
本集會は少くとも日本國民の過半數を代表するものと確認す
故に帝國議會をして立法上に此旨義を執らしめざるべからず
故に政府をして行政上に此旨義を執らしめざるべからず
茲に本會の旨趣を公表す

全國同志新聞雜誌記者懇親會

は之に次て十三日府下京橋木挽町の萬安に開かれ、七十六新聞雜誌社より百六十人會せられたり。而して議を定めて曰く、

全國同志新聞雜誌記者は自主的對外政畧の主義を執り責任內閣の完成を期す

貴衆兩議院議員大懇親會

は十六日芝紅葉館に會したり。貴族院議員四十八人、衆

議院議員に三人。以て相應呼して意見を遂行すべく約しぬ。

　全國十五大學校出身者同志大懇親會

帝國大學、舊司法省法學校、札幌農學校、慶應義塾、同志社、明治法律學校、和佛法律學校、東京專門學校、東京法學院、專修學校、獨逸學協會學校、舊同人社、舊佛學塾、哲學館、關西法律學校より會せられて、

今夕來會せし十五大學校出身同志者は、堅く對外硬非藩閥の主義を執ることを公表す、

と議したり。去る十九日。

　言論の版圖廣き幾何

現時の伊藤内閣は初めて組織してより茲に一年十月を經たり。其間に新聞紙の發行を停止したること四十七回其日數四百に達せんとすと云ふ。知るべし今の言論の版圖廣さ幾何かを。

　女齒科醫

婦人にして齒科醫たるもの、府下日本橋區本町二丁目十二番地に高橋孝子あり。我邦稀に聞く所なり。

　風を愛づるの時

綠陰滿地子規啼く。風を愛づるの時は方に將に臻らんとするなり。或人は歌ひき、

折にふれ、めづるはこゝろ。
時につれ、かはるはこゝろ。
心こそ、定めもあらぬ。
彌生山、花咲く頃は、
花ゆゑに、いとひし風を。
夏たちて、茂りあへれば、
吹き渡る、いろを涼しみ、
珍らしと、待ちこそむかへ。
そよぐわか葉に。



明治廿五年九月十四日遞信省認可

東京市京橋區西紺屋町廿六七番地　秀英舍印行